Bulletin of Jumonji University, vol.48-2, 2017

研究ノート

# 放課後児童クラブ職員の職務に対する想い
## ―やりがいとストレスと学びのニーズとの関係から―

# Thinking about Work of After-school Childcare Instructor for School children
## ― Relationship between sense of mission、stress and learning needs ―

布施　晴美[1)]
Harumi FUSE
風間　文明[1)]
Fumiaki KAZAMA
安田　哲也[2)]
Tetsuya YASUDA
長田　瑞恵[3)]
Mizue NAGATA
加藤　陽子[1)]
Akiko KATO

**要旨**

放課後児童クラブの職員（以下、児童支援員とする）の職務に対する「やりがい」「ストレス」「学びのニーズ」の実態を把握し、現状の問題点を明らかにするために調査を行った。児童支援員を対象に郵送法による無記名の質問紙調査を実施し、115人から回答を得た（回収率49.6%）。児童支援員という仕事に対して、研修が必要な仕事であり、仕事が社会貢献につながり、充実感があり、やりがいを感じていることが示された。ストレスとしては、「児童数が多すぎること」、「安全面への配慮」、「支援員としての知識や能力の不足」、「気になる子どもへの対応」「児童支援員の処遇」がストレスの上位項目であることが示された。「学びのニーズ」は、「子どもの健全な発達を促進するための知識と支援」、「特別な状況の子どもに対する理解と対応」、「子どもの生命と安全を守るための知識と技術」、「子どもを取り巻く家族の支援」、「連携と関係性の構築」、「日々の保育業務と業務の効率化」、「職員教育」、「自己研鑽」がカテゴリーとして挙げられ、「ストレス」とした項目を「学び」で乗り越えようと対応している状況が示された。困難さやストレスはあるが、子どもの健全な成長を支える仕事に使命感を持ち、困難さを学ぶことによって少しでも解決につなげていこうとする想いを児童支援員が抱いていることが明らかになった。また「学びのニーズ」に応じた内容の研修機会を提供することも必要であるが、仕事に対するバーンアウトに陥らないための支援的な関わりも必要であることが見出された。

[1)] 十文字学園女子大学人間生活学部　人間発達心理学科
Department of Human Development Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University
[2)] 東京電機大学理工学部
Faculty of Science and Engineering, Tokyo Denki University
[3)] 十文字学園女子大学人間生活学部　幼児教育学科
Department of Early Childfood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：放課後児童クラブ、放課後児童支援員、やりがい、ストレス、学びのニーズ

## はじめに

放課後児童クラブ（以下、学童保育）は、児童福祉法に基づいた放課後児童健全育成事業を展開する場として定められている。この放課後児童健全育成事業とは、「小学校に就学している児童であって、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全を図る事業」をいう。

学童保育は、全国学童保育連絡協議会（2016）によると、年間を通してみると学校よりも長い時間子どもが過ごす場となっているという。学童期の子どもの発達課題には、基本的生活習慣獲得や身辺自立ができること、集団生活の中で社会性を身につけること、社会のルールを学び規範意識の基礎を形成していくことなどがあげられる。また有能感を育み、劣等感を克服することを学ぶ大切な時期でもある。そのような時期の子どもたちの放課後および夏季休業期間などに親（保護者）に代わって支援しているのが、学童保育の職員（以下、児童支援員）である。

さらに、平成27年３月に厚生労働省から「放課後児童クラブ運営指針」が示され、その中には、「子どもの最善の利益を考慮して育成支援を推進」することが明記されている。放課後児童クラブにおける育成支援については、「子どもが安心して過ごせる生活の場としてふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性および創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等により、子どもの健全な育成を図ること」を目的としている。こうした目的を達成するためには、児童支援員の個々の役割が重要であり、期待されているところである。つまり、学童保育の現場では、子どもを自由に遊ばせるなどの居場所提供だけではなく、子どもの安全安心な生活と健全な成長発達支援が児童支援員に求められている。

現在学童保育の現場は、社会の求めに応じて受け入れ利用児童数が増加し規模が拡大する一方で、大規模化、狭隘化、発達障害やアレルギー疾患など配慮を有する児童の増加、児童支援員の専門性、児童支援員の不足や処遇などが問題として取り上げられている（全国学童保育連絡協議会, 2016、上村他, 2013、塚田他, 2013、木村他, 2015）。こうした現状の中で、児童支援員は困難さやストレスを抱えながら、やりがいや使命感を持って子どもの成長を支えている。

本研究では児童支援員が持つ職務上のストレスとやりがい、児童支援員が必要としている学びについての実態を把握し、現状の問題点を明らかにして児童支援員を支援するための方策を検討するための資料としたいと考える。

## 研究目的

放課後児童クラブに勤務している職員が日々の職務の中で感じている「やりがい」と「ストレス」、および「学びのニーズ」についての実態を把握し、現状の問題点を明らかにする。

## 研究方法

### １．調査対象および調査時期

調査対象者は、埼玉県Ａ市・Ｂ市・Ｃ市の放課後児童クラブに勤務している職員（以下、児童支援員）232人を対象に、2017年３月～５月に調査を実施した。尚、対象とした放課後児童クラブは、自治体が管理・委託している施設とし、運営主体が民間企業の施設は含んでいない。

### ２．調査方法および手続き

郵送法による無記名の質問紙調査を実施した。埼玉県内のＡ市・Ｂ市・Ｃ市３市の放課後児童クラブ施設ごとに、質問紙を郵送し、各クラブに勤務している児童支援員（正規・非正規の人すべ

て）に配布されるよう、施設責任者に協力を依頼した。その際に、施設責任者の負担や調査協力の強制性が発生しないよう、児童支援員が利用する施設内のテーブル等に質問紙と返信用封筒を置いてもらい、対象者の自由意志により調査用紙を受け取ることができるよう求めた。

回答は無記名にて実施し、秘匿性を維持するために、返信用封筒にて回答者が各自で投函するよう依頼した。質問紙の表紙には、研究目的および個人情報の保護、回答の拒否による不利益が発生しないこと等について記し、回答の返送をもって調査協力の同意とみなした。

### ３．調査内容

調査内容は、対象の属性として、性別、年齢、児童支援員としての経験年数、現在の施設での勤務年数、雇用形態、１週間当たりの勤務日数、資格・免許、児童支援員以外の職業経験、転職の希望、について回答を求めた。また、児童支援員の仕事のやりがいに関する尺度28項目、放課後児童支援員のストレス尺度57項目、日々の生活の中で感じる充実感・満足感尺度15項目を設けた。更に、児童支援員の仕事をする中で「もっと詳しく学びたい」と思っていることや「必要だ」と感じる知識など学びのニーズについて自由記述を求めた。

児童支援員の仕事のやりがいに関する尺度28項目は、「職業的自尊心尺度（岡本・堀・鎌田・下村　2006）」および「天職感尺度（岡本・堀・鎌田・下村　2006）」を用いた。生活の中での充実感・満足感尺度15項目は、近藤・鎌田（1998）の「生きがい感尺度」を参考にした。放課後児童支援員のストレス尺度についても、いくつかの尺度を基に作成した。各尺度の詳細は、次の通りである。

**職業的自尊心尺度**：岡本・堀・鎌田・下村（2006）による職業的自尊心尺度を使用した。全16項目について同意する程度を「そう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の５つの選択肢から選ぶ５件法で回答を求めた。

**天職観尺度**：岡本・堀・鎌田・下村（2006）による天職観尺度を使用した。全12項目について同意する程度を「そう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の５つの選択肢から選ぶ５件法で回答を求めた。

**放課後児童クラブ支援員のストレス尺度**：赤田（2010）による保育士ストレス評定尺度29項目を元に、西坂（2002）による幼稚園教諭用ストレス評定尺度、宮下（2010）による保育士におけるストレッサー尺度を参考に、かつ共同研究者間で合議の上、不足すると思われる項目を補足追加した。各項目について放課後児童クラブの支援員用にワーディングを整えて全57項目の尺度を作成した。回答形式は、各項目についてどれくらいストレスに感じるかを、「とてもストレスを感じる」、「ややストレスを感じる」、「どちらともいえない」、「あまりストレスを感じない」、「全くストレスを感じない」、「経験がないまたは感じたことがない」の６つの選択肢から選択する６件法とした。

**生きがい感尺度**：近藤・鎌田（1998）による生きがい感尺度31項目から岡本ら（2006）が15項目を抽出し文体を改めたものを使用した。回答形式は各項目にあてはまる程度を「とてもよくあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の５つの選択肢から選ぶ５件法とした

### ４．倫理的配慮

本調査は、十文字学園女子大学研究倫理委員会の承認（2016-030）を得て実施した。質問紙は、無記名であるが、調査で得られた内容など個人情報は他の目的では一切使用しないこと、個人が特定できる形では公表しないこと、調査は強制ではないこと、調査に協力しなくても不利益は発生しないこと等を質問紙の表紙に記載し、また、施設

責任者に文書で説明し、回答の返送をもって調査協力への同意とした。

## 結果

### 1．対象の属性について

質問紙調査は115名から回答を得た（回収率49.6%）。

回答者の性別の内訳は、女性106名（92.2%）、男性９名（7.8%）と女性が９割を占めていた。年齢は、平均45.9歳（SD12.1）であった。年齢構成（図１）については、50代40名（34.8%）が最も多く、次いで40代27名（23.5%）となっていた。

児童支援員としての経験年数は、平均7.2年（SD7.2）であった。経験年数の構成（図２）については、１～４年が最も多く43名（37.4%）、次いで５～９年33名（28.7%）となっていた。また、現施設における経験年数は、平均3.3年（SD3.1）であった。

現在の雇用形態は、正規職員36名（31.3%）、嘱託・派遣・契約職員が20名（17.4%）、パート・アルバイトが57名（49.6%）、無回答２名（1.7%）となり、パート・アルバイトがほぼ半数を占めていた。

１週間の勤務日数は、平均5.23日（SD0.58）、最小３日、最大７日で、５～６日と回答する人が多かった。

現在保持している資格・免許（放課後児童支援員認定資格は除く）については、表１に示した。最も多い資格は、幼稚園教諭39名（33.9%）、次

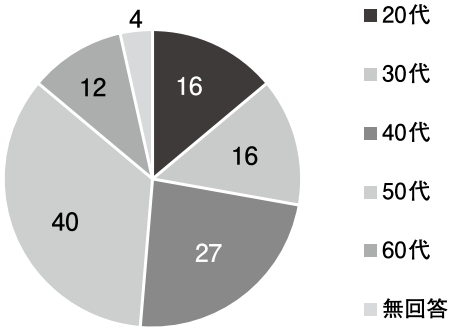


図１　年齢構成（n＝115）

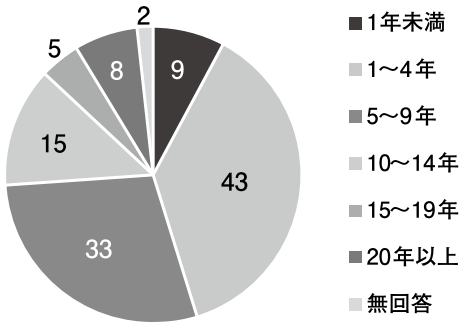


図２　経験年数（n＝115）

表１　児童支援員が保有している免許・資格（複数回答・n＝115）

| | |
|---|---|
| 幼稚園教諭 | 39人（33.9%） |
| 保育士 | 32人（27.8%） |
| 中学・高校・特別支援学校の教諭 | 31人（27.0%） |
| 児童指導員任用資格 | 17人（14.8%） |
| 小学校教諭 | 9人（7.8%） |
| ホームヘルパー（介護職員） | 6人（5.2%） |
| 介護福祉士 | 3人（2.6%） |
| 養護教諭 | 2人（1.7%） |
| こどもサポーター | 1人（0.9%） |
| その他 | 13人（11.3%） |
| 無資格 | 27人（23.5%） |

いで、保育士32名（27.8％）、中学・高校・特別支援学校の教諭31名（27.0％）となっていた。無資格と回答した人は27名（23.5％）であった。無資格と回答した人の中には、放課後児童支援員認定研修を受講し資格を持っている人、あるいは受講中の人も含まれていると思われるが、本調査では正確な把握はできていないため、表示は控えることとした。

児童支援員になる前に、他の職業についていたかどうかについては、前職あり93名（80.9％）、前職なし22名（19.1％）となっていた。転職の希望（表２）については、転職を希望していない人が92人と８割を占めていた。

表２　転職の希望（n＝115）

| | |
|---|---|
| 転職することを決めている | ７人（6.1％） |
| はっきり決めていないができれば転職したい | 12人（10.4％） |
| 転職を考えたことはあるが今はその気はない | 35人（30.4％） |
| 転職する気は全くない | 57人（49.6％） |
| 無回答 | ４人（3.5％） |

## ２．児童支援員の仕事に対するやりがいについて

児童支援員の仕事に対するやりがいについては、「やりがい」に関する尺度の各項目の得点の平均値を算出し比較した。尺度項目は、１～５点の得点で示され、得点が高いものほど強くやりがいを感じていることを示している。28の質問項目の中で、３点が「どちらともいえない」ということから、回答から平均得点が4.0以上のものを点数の高い順に示した（表３）。また平均得点が3.0未満のものについては、７項目が該当した（表４）。児童支援員という仕事に対して、研修が必要な仕事であり、仕事が社会貢献につながり、充実感があり、やりがいを感じていることが示された一方で、児童支援員という仕事が、天職として生涯続けていく職業であるとはとらえていない面も示されていた。

日々の生活の中で感じる充実感・満足感に関しても、各項目の得点の平均値を算出し比較した。尺度項目は、１～５点の得点で示され、得点が高いものほど充実感・満足感を感じていることを示している。15の質問項目の中で、３点が「どちらともいえない」ということから、回答から平均得点が4.0以上のものに注目したが、該当するものはなかった。3.5以上のものについては、６項目

表３　児童支援員の職業に対して「やりがい」得点が高い項目

| | 質問項目 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 自分の職業では研修や学習が重要である | 115 | 4.32 | 0.843 |
| 7 | 自分の職業は家族に認められている | 115 | 4.23 | 0.852 |
| 11 | 自分の職業は社会に貢献している | 115 | 4.23 | 0.862 |
| 4 | 自分の職業にやりがいがある | 114 | 4.2 | 0.84 |
| 20 | 自分の職業は人々の役に立っている | 114 | 4.11 | 0.726 |
| 3 | 自分の職業に充実感がある | 115 | 4.03 | 0.783 |

表４　児童支援員の職業に対して「やりがい」得点が低い項目

| | 質問項目 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|---|
| 22 | 今の職業は天職だと感じる | 114 | 2.95 | 1.12 |
| 10 | 自分を犠牲にしてでも仕事に自分を捧げたい | 114 | 2.58 | 1.151 |
| 27 | 生まれ変わっても、今と同じ職業につきたい | 113 | 2.41 | 1.107 |
| 26 | 私は職業に人生を捧げている | 113 | 2.32 | 0.984 |
| 21 | 死ぬまでこの職業に就いていたい | 112 | 2.31 | 1.139 |
| 2 | 自分の子どもに自分と同じ職業に就かせたい | 114 | 2.3 | 0.931 |
| 13 | この職業に就くために私は生まれてきた | 114 | 2.14 | 0.949 |

が該当した（表５）。また平均得点が3.0未満のものについては、２項目が該当した（表６）。日々の生活については、やや充実しているという様子が示された。

### ３．児童支援員の仕事に対するストレスについて

児童支援員のストレスについては、放課後児童クラブ支援員のストレス尺度の各項目の得点の平均値を算出し比較した。尺度項目は、０～５点の得点で示され、得点が高いほどストレスを強く感じることを示している。57の質問項目の中で、３点が「どちらともいえない」ということから、回答から平均得点が3.0以上のものを点数の高い順に示した（表７）。

児童数が多すぎること、安全面への配慮、支援員としての知識や能力の不足、気になる子どもへの対応、児童支援員の処遇等がストレスの上位項目であることが示された。

### ４．児童支援員の学びのニーズ

日々の仕事の中で「もっと詳しく学びたい」と思っていることや「必要だ」と感じる知識について自由記述を求めた。67人から回答が得られた。回答者について転職希望者の有無による記入の違いは見られなかった。また、正規・非正規等の雇用形態による記入の違いは見られなかった。

記述内容について整理し、カテゴリー分類をした（表８）。

表５　児童支援員が日々の生活の中で感じる充実感・満足感得点の高い項目

| | 質問項目 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|---|
| 10 | 人のために役に立ったと感じることがある | 115 | 3.63 | 0.729 |
| 15 | 私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っている | 115 | 3.63 | 0.922 |
| 13 | 私は物事にやる気を持っている | 115 | 3.61 | 0.813 |
| 3 | 私は今幸せを感じている | 114 | 3.54 | 0.911 |
| 14 | 私には目的があり、達成したいことがある | 114 | 3.52 | 0.976 |
| 4 | 私の毎日は充実している | 115 | 3.5 | 0.823 |

表６　児童支援員が日々の生活の中で感じる充実感・満足感得点の低い項目

| | 質問項目 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 自分の人生に大きな期待を持っている | 114 | 2.99 | 0.917 |
| 5 | すべての物事が順調に進んでいる | 115 | 2.94 | 0.841 |

表７　児童支援員が強くストレスとして感じていること

| | 質問項目 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|---|
| 47 | 施設で保育する児童数が多すぎること | 115 | 3.74 | 1.22 |
| 1 | 子どもの安全のために絶えず注意を払っていなくてはならないこと | 115 | 3.63 | 1.13 |
| 2 | 自分の支援員としての能力の不足感 | 115 | 3.57 | 0.94 |
| 4 | 自分の知識が不足していること | 114 | 3.49 | 1.04 |
| 10 | 気になる子どもに上手く対応できないこと | 115 | 3.47 | 1 |
| 41 | 仕事の量に対して人手不足なこと | 115 | 3.47 | 1.38 |
| 7 | 仕事に見合った給料がもらえていないこと | 114 | 3.39 | 1.45 |
| 46 | 子どもの不作法な行動や生意気な態度 | 115 | 3.32 | 1.2 |
| 34 | 一人ひとりの子どもとの関わりを十分に持てないこと | 115 | 3.23 | 1.04 |
| 14 | 能力に応じていないなど給与体系の矛盾 | 114 | 3.19 | 1.41 |
| 9 | 子どもの安全に対して十分に配慮できていないこと | 115 | 3.12 | 1.13 |
| 49 | 子どもの食物アレルギーに対して配慮すること | 115 | 3.12 | 1.32 |
| 12 | 狭い、古いなど施設の環境がよくないこと | 115 | 3.11 | 1.43 |
| 21 | 保護者によって子どもに対する理解が異なること | 115 | 3.04 | 1.25 |
| 56 | 自分の支援員としての資質に対する不安 | 115 | 3.04 | 1.18 |
| 57 | 子どもをうまく叱ることができないこと | 115 | 3.01 | 1.25 |

表８　児童支援員の学びたいこと・必要と感じている知識

| カテゴリー | サブカテゴリー | 記述内容の抜粋・要約 |
|---|---|---|
| 子どもの健全な発達を促進するため知識と支援 | 子どもの成長発達の理解 | ・児童期の子どもの発達（心・体・脳） |
| | | ・小学生の性質、個々の特性の理解 |
| | | ・子ども成長に合った支援・対応 |
| | | ・児童心理学 |
| | 子どもの生活面における健全な発達のための支援 | ・子どもの発達を支援 |
| | | ・子どもの生活面・学習面の自立を促す |
| | | ・道徳面の指導 |
| | 特別な環境の子どもの理解 | ・1人親の子どもの気持ち |
| 特別な状況の子どもに対する理解と対応 | 子どもの行動の意味の理解と対応 | ・困った行動にも意味がある |
| | | ・困った行動をする子どもの理解 |
| | | ・対応の難しい子ども |
| | | ・子どもに生じやすいトラブル |
| | | ・子どもの暴力・暴言に対する対処 |
| | | ・子ども同士のいじめやけんか |
| | | ・けんかの仲裁、うまく聞き出す方法 |
| | 障害のある子ども・グレーゾーンの子どもの理解と対応 | ・グレーゾーンの子ども・障がいのある子どもの理解と対応 |
| | | ・発達障害の子どもの特徴と支援 |
| | 子どものメンタルヘルス | ・子どもの心の病についての理解 |
| | | ・子どもの精神面 |
| 子どもの生命と安全を守るための知識と技術 | 子どもの応急手当 | ・子どもの保健衛生 |
| | | ・応急手当、子どものケガ |
| | | ・救命処置、AED |
| | | ・アレルギー |
| | 子どもの安全確保 | ・虐待・震災等の非常時の対応 |
| | | ・危機管理 |
| | | ・他機関との連携 |
| 子どもを取り巻く家族の支援 | 家族支援 | ・問題抱えた家庭の個別対応、つなぎ役 |
| | | ・社会資源の紹介 |
| | | ・メンタルサポート（家庭環境の複雑化のため、家庭内も変化） |
| | 保護者との関係性の構築と支援・よりそい | ・親力をどう伸ばすか |
| | | ・保護者との関係づくり |
| | | ・親の気持ちに寄り添うこと |
| | | ・保護者対応、関わり方、伝え方、コミュニケーションの取り方 |
| | | ・保護者からのクレーム対応 |
| | | ・意見違いをクレームと取らないために |
| | | ・保護者の気持ちの理解と対応 |
| 連携と関係性の構築 | 学校・保護者との連携と関係性の構築 | ・学校との連携と情報交換 |
| | | ・保護者・学校と円滑な連携が取れるための技術スキル |
| | 職員間の連携と関係性の構築 | ・仕事仲間との連携と注意点 |
| 日々の保育業務と業務の効率化 | 子どもとの直接的な関わりの中での保育業務 | ・学童クラブの仕事 |
| | | ・保育を進めていくための技術 |
| | | ・母の日・夏休み・クリスマスの制作など簡単に作れるもの、創作物・アイディア |
| | | ・遊び・ゲーム、レクリエーション |
| | | ・アイスブレーキング |
| | 大規模化の中での保育展開 | ・子どもの数が増える中での保育の進め方 |
| | | ・大きな集団への取り組み |
| | | ・チームワークづくり |
| | | ・大規模化の影響 |
| | | ・スペース改善の仕方 |
| | 保育業務以外の仕事 | ・ミーティングの進め方 |
| | | ・パソコン業務、お便りづくり、業務作業の効率化 |
| | | ・行政への働きかけ |
| 職員教育 | 職員教育と次世代職員の育成 | ・職員指導、新人職員指導 |
| | | ・次世代職員の育成（中堅職員の慢性的な不足のため） |
| 自己研鑽 | 専門職種として自己の能力・態度を高める | ・事例検討 |
| | | ・人に対する尊重と信頼（大人子ども問わず） |
| | | ・対人力・コミュニケーション力を高めるための研修 |

カテゴリーとして、「子どもの健全な発達を促進するための知識と支援」「特別な状況の子どもに対する理解と対応」「子どもの生命と安全を守るための知識と技術」「子どもを取り巻く家族の支援」「連携と関係性の構築」「日々の保育業務と業務の効率化」「職員教育」「自己研鑽」の８のカテゴリーと17のサブカテゴリーを抽出した。

## 考察

### １．児童支援員の「やりがい」と「ストレス」と「学びのニーズ」

児童支援員の背景について、40代50代が６割近くを占め、また、児童支援員として働く前に別の職業についていた人が８割おり、転職して児童支援員となって勤務している人が多いことが示された。一方で、転職を希望している人は、２割弱で、多くは現在の児童支援員としての職務に打ち込んでいる姿が明らかになった。仕事に対するやりがいについても、子どもの健全育成のために社会の求めに応じた社会貢献であり、使命感を持って児童支援員としての仕事に携わっていることが示されている。さらに児童支援員という職務は、専門性を求められており研修や学習が必要な職業であるという認識を持っていることが示された。

一方で、ストレスと感じていることについては、「47. 児童数が多すぎること」、「１，９，49. 安全面への配慮」、「２，４．支援員としての知識や能力の不足」、「10，46. 気になる子どもへの対応」、「41，34. 児童支援員の人不足」、「７，14. 児童支援員の処遇」が上位項目として示された。保育所と同様、待機児童の問題は学齢期の子どもにもおこり、多くの児童を受け入れざるを得ない状況で大規模化が問題となり、子どもとじっくり関われないことがジレンマとなっていることが予想できる。また、児童数が多いと、狭い環境での事故・怪我の予防など安全面への配慮も重要であり、子ども同士のトラブルも増え集団をまとめるスキルも要求される。ここで示された児童支援員が感じるストレスは、どこの地域でも生じている困難感であるといえる。丸山（2013）は、発達障害の診断をなされていない子どもの中にも「気になる子ども」は少なくないと述べ、学童保育における気になる子どもの実態と課題について、次のように報告している。気になる子どもの実態として、「他の子どもとのトラブルが多い」「ルールを守れないことが多い」「指示や連絡が伝わりにくい」「過剰に甘える（大人に関わりを求める）」「乱暴な言葉が目立つ」が上位にあげられている。課題についても「子どもに十分関わるための指導員体制がない」「他の子どもとのトラブルが多い」「他の子どもの理解作りが難しい」「気になる子どもに関する巡回相談の充実が必要」などを挙げている。

本調査の「学びのニーズ」に関する記述については、「子どもの健全な発達を促進するための知識と支援」「特別な状況の子どもに対する理解と対応」「子どもの生命と安全を守るための知識と技術」「子どもを取り巻く家族の支援」「連携と関係性の構築」「日々の保育業務と業務の効率化」「職員教育」「自己研鑽」の８つのカテゴリーが抽出されたが、「ストレス」項目の得点の上位にあった「安全面の配慮」「支援員としての知識や能力の不足」「気になる子どもへの対応」などが含まれていることが示された。職務で強く感じている「ストレス」は、「学ぶこと」で乗り越えるようとしている実態が示された。

本調査から職務に対して困難さやストレスがあるが、子どもの健全な成長を支える仕事に使命感を持ち、困難さやストレスを学ぶことによって少しでも解決につなげていこうとする児童支援員の想いが明らかになった。

### ２．課題と取り組み

児童支援員の仕事は、ストレスや困難さを抱えているもののやりがいや使命感によって成り立っていることが示された。しかし、そのやりがいや使命感を持っていた仕事が、天職として生涯続け

ていく職業であるとはとらえていない面も示された。ストレス項目に挙げられている処遇に対する課題や大規模化・狭隘化等に起因した困難感によるものが要因となっていると思われる。職務に対する使命感との葛藤が生じ、日々の業務の中で心身の疲弊まねき虚無感を生じる可能性を招くことも考えられ、バーンアウトに陥らないような支援も重要であるといえる。

平成27年度から厚生省が定めるところの24時間の「放課後児童支援員認定資格研修」が「放課後児童支援員」としての有資格者となるために実施されている。一定水準以上の質の確保を図ることを目指した研修であり、放課後児童支援員の専門性を意識させるものである。一方で、現状の児童支援員の困難感や学習ニーズを鑑みると、この研修だけでは十分とは言えない。児童支援員の経験年数による役割の違いや初任者の指導あるいはサポートをする技術も必要である。学びのニーズはさまざまである。木村・中村（2015）も指導員が感じている問題点として、運営、指導員のスキル・マネジメント、保育・遊び等の内容、利用者の関係を挙げており、指導員経験歴によって質や量が異なっていると指摘している。経験年数を問わず児童支援員の職務が自己流に陥らないために認定資格研修のような共通の普遍的な研修も必要であるが、新人の児童支援員・中堅の児童支援員等に求められる役割に関すること、各学童保育現場で抱えている課題、現在の社会問題となっている事象など、学びのニーズに応えられるような研修の機会を設けていくことも大切である。

一方で研修会の機会をただ増やすのではなく、児童支援員のバーンアウトに対する支援も重要である。研修を受け、専門性を高めた児童支援員が、長く勤務できる環境づくりは必須である。

取り組みについては、例えば筆者が所属しているような大学の立場でできることとして、地域連携の視点で連携し、児童支援員の困難さを支援する場があることを示すことが大切と考える。児童支援員の困難さやストレスを理解し、寄り添う姿勢を示していかなければならない。児童支援員を支援する側としては、現状把握、情報収集をし、現場との乖離がないよう努めていく必要がある。困難感の解決に向けて基礎的データを蓄積し、外部に向けて発信もしていくことも必要であると考える。

## おわりに

児童支援員は、日常の仕事の中で困難さやストレス感じながら、子どもの健全な成長を支える仕事に使命感を持ち、学ぶことによって少しでも困難さを解決につなげていこうとする想いを抱いていることが明らかになった。一方でバーンアウトに陥る可能性もあり、児童支援員に対する支援的な関わりも重要であるといえる。

今後の課題として、児童支援員の学びのニーズを充足すると共に、児童支援員に対する支援的な関わりの具体的な展開を検討していく必要がある。また、今回使用した尺度項目について再度精査解析が必要であり、児童支援員の状況により適したものを再構成し分析を深めていきたいと考えている。

本研究は平成28年度十文字学園女子大学COC事業地域課題解決型研究「学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み（代表者：布施晴美）」の中で行った調査である。

本調査にご協力下さった放課後児童クラブの職員の皆さまに心より感謝申し上げます。また、本調査は、調査対象としました放課後児童クラブを管轄している自治体の関係者の皆さま、社会福協議会の皆さまのご理解ご協力のもと実施することができました。心より御礼申し上げます。

## 引用文献

赤田太郎（2010）：保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究，81,

158-166.
木村文香・中村千城（2015）：学童保育サポートシステムの構築に関する研究―指導員が感じている問題―　日本教育心理学会総会発表論文集，57，661.
近藤勉・鎌田次郎（1998）：現代大学生の生きがい感とスケール作成　健康心理学研究，11，73-82.
厚生労働省編（2017）：放課後児童クラブ運営指針解説書，フレーベル館.
丸山啓史（2013）：学童保育における「気になる子ども」の実態と課題　京都教育大学教育実践研究紀要，14，79-88.
宮下敏恵（2010）：保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討　上越教育大学研究紀要，29，177-185.
西坂小百合（2002）：幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス，ハーディネス，保育者効力感の影響　教育心理学研究，50，283-290.
岡本浩一・堀洋元・鎌田晶子・下村英雄（2006）：職業的使命感のマネジメント　新曜社.
塚田由佳里・小伊藤亜希子（2013）：集団規模と平面構成から見た学童保育の特徴―京都市の事例から―　生活科学研究誌・住環境分野，12，21-34.
上村弘樹・坂本大輔・伊勢正明（2013）：学童保育における指導員の困難性に関する研究～学童保育所指導員を対象とした質問紙調査の結果から～　帯広大谷短期大学紀要，20，59-68.
全国学童保育連絡協議会（2016）：2016年５月１日現在の学童保育実施状況調査―報道発表資料 http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/